

内村鑑三の宇宙観と伝統思想——『報徳記』の〈翻案〉を手がかりとして——

今高義也

はしめい

Cosmos is an ever-growing organism; Life is an ever-growing process. So, in the whole universe there is nothing to be feared and all thing to be hoped.

Jan. 4, 1910. Kanzo Uchimura / Kashiwagi near Tokyo
〔宇宙は不斷に生長しつゝある生体である。生命は不斷に生長しつゝある過程である。故に全宇宙において恐るくやるものは何もなく、万物は希望に溢れてゐる。

一九一〇年六月四日　内村鑑三／東京市外柏木(1)
内村鑑三（一八六一—一九三〇）の思想において、「宇宙」

の観念は重要な位置を占めてゐる。それは自然と人類の歴史の全てを包み込みながら絶えず生長発展していくところの神の創造になる究極的世界の謂であつて、著名な「二つのJ（Jesus & Japan）を愛す」との提題に集約される内村の思想と行動を、根底から規定する觀念といつてよ。

この内村の宇宙觀の輪郭と、その背景にあるとみられる西洋思想（キリスト教創造主基督神信仰・進化論・社会有機体説・ロマン主義的自然觀等）については、これまで一定の言及がなされているが、その伝統思想との関連は、指摘はされてい（2）
るものの十分に明らかにされてゐるとは言えない。本稿は、

Japan and the Japanese (一八九四年、民友社)における「宇宙」
德論——NINOMIYA SONTOK. A PEASANT-SAINT——に

おける『報徳記』の〈翻案⁽³⁾〉を手がかりにいの問題を検証し、伝統思想から明治プロテスタンティズムへの思想史的移行の一侧面に光を当すよハシマラムのやある。

1 『報徳記』の〈翻案〉をめぐら

1 Nature

初めに、苦学する少年尊徳（当時金次郎、以下尊徳）が不毛の地を畠へ耕し油菜を収穫する場面の〈翻案〉に注目しておめたゞ（以下、〈翻案〉の引用は原則として『報徳記』本文（真）→ *Japan and the Japanese* (章) の順で示す。引用文中の「」は尊徳の言葉である。下線と傍線は引用者による）。

〔尊徳〕天を仰ぎ歎じて曰く「我不幸にして父母を喪ひ、幼にして独立する」とあたはず、他人の家に養はれ日々を送るところも、筆道文学を心掛さんば一生文盲の人となり、父祖伝来の家を興す」と難かるべし。我自力を以て勞る時は其〔伯父の〕怒りに触る」と無る所しう。是に於て川縁無毛の地を起し油菜を蒔か其實り七八升を得たり。(一一)～(一四)

→ Then came a thought to him that he would not grow up to be an illiterate man, an "open-blind" to be wisdoms of ancients. Sontok considered his uncle's resentment

reasonable, and gave up his study till he could have oil of his own to burn. So the next spring he broke up a little land that belonged to nobody, on the bank of a river, and there planted some rape-seed and gave all of his holidays to the raising of this crop of his own. At the end of one year, he had a large-bagful of the seed, the product of his own hand, and received directly from Nature as a reward of his honest labor. (≡)

末尾の and received directly from Nature as a reward of his honest labor は内村によれば附加であつて、『報徳記』本文には脱出されな。尊徳が得た収穫は、その「実直な労働」に対する Nature からの「直接」(directly) の「報償」(reward) だつた。内村はみてくる。一般に nature は、人間主体と対立するものの自然界を指すが、内村の Nature は、その大文字表記による示唆されている所⁽⁴⁾。nature や超えた存在（人格的創造神）を背景に持つてゐる。Nature は從来括弧付で「自然」と訳されてゐるが、『報徳記』の〈翻案〉において Nature が當てられたのは、超越的な「天」をその背後に持つ「天地」であろう。周知のよべに尊徳における「天道」は万物を生育する「天地」固有の道であり、人間の作為工夫としての「人道」と区別され、その上に、人間にとつての〈収穫〉は両者が「和」す

「」によつてもたゞれぬ、とれる。⁽⁶⁾他方内村も、一九世紀初頭の日本の農地荒廃の原因を「実直な労働」の衰退

に求め、徹底的な〈現地調査〉と勤労の指導により Nature's laws [天道] と〈和し〉、荒廃した農村を復興させる

より「人道」の実践者として尊徳を位置づけてゐる (The whole cause of their evils was moral, and Nature refusing to reword her ignoble sons, brought about all the miseries that befell the land. Then was born a man whose spirit was in league with Nature's laws.⁽⁷⁾)。」のよう内村におこし Nature なこし Nature's laws は、「天道」を固有の法則とする大自然としての「天地」に対応する訛語とみられる。その「天道」に信頼して trust in Nature and her beneficial laws (») 惜しみなく「人道」に励む者に、「天地」は豊かに報いぬ、とこうのである。

《the》 Universe, but its sincerity can over Heaven and Earth.” (☞)

「」にゆうべ内村は初めて「宇宙」(《the》 Universe)⁽⁸⁾を挿入し、「一人の心は誠に僅々たるが、」を An individual soul is an infinitesimally small thing in 《the》 Universe の語彙とする。「宇宙」におこつては微々たる存在に觀る個我が、その至誠 (sincerity) により「天地」(Heaven and Earth) をも動かす。先に Nature が対応すると指摘した「天地」が、りこじて Heaven and Earth と(逐語訛) われ、やうにそれが Universe の同義語として(引用) われてくることに注意したる。すなわち『報徳記』本文の「天地」は、やの文脈に応じて Nature / Heaven and Earth / Universe の三通りに訛るべく書かれてゐる。

では Universe は Nature とはどのように区別されまた関連するのか。けだしその Universe の性格がより明確に示されているのは、挿話「先生大磯駿川崎屋孫右衛門を教諭シ廃家ヲ再復ス」(『報徳記』卷四) の(翻案)である。まず、内村が注目したと思われる尊徳の次の言葉に注目しておきたい。

「

かような「人道」と交感する「天道」このことは、しばしば次のような表現もとられる。

「人の心は誠に僅々たるが、」しめく「」、其至誠に至ては鬼神之が為に感じ、天地の大なるものか為に感動す」(一六八)

→ “An individual soul is an infinitesimally small thing in

2 Universe

かのような「人道」と交感する「天道」このことは、しばしば次のような表現もとられる。

「人の心は誠に僅々たるが、」しめく「」、其至誠に至ては鬼神之が為に感じ、天地の大なるものか為に感動す」(一六八)

→ “An individual soul is an infinitesimally small thing in

かのような「人道」と交感する「天道」このことは、しばしば次のような表現もとられる。

「人の心は誠に僅々たるが、」しめく「」、其至誠に至ては鬼神之が為に感じ、天地の大なるものか為に感動す」(一六八)

→ “An individual soul is an infinitesimally small thing in

轉するもの稀なり。是に由て之を觀るに其禍の根元も亦必ず深し。彼代々米穀を以て渡世すと、然るは天明卯辰両年の凶荒に当り多分の米粟を高値に鬻め大利を得て以て家を富し計策を得たりとして積善の行ひなかりしか。人の禍を得る時は之を憐み之を助るの道あるを以て人道とせり。人の憂ある時に当り我独り利を貪るものは天の廢する所なり。(一八九)

天地間万物一理。……何ぞ孫右衛門独り善を植て惡の実のりあらん(一九一)

To his eye, ill-gotten fortune was no fortune at all. ... He could do nothing with false insincere men. Universe and its Laws were against such men, and nothing in his power or any man's power could rescue them from misery and degradation. Them he would first reconcile with the "Reason of Heaven and Earth," and then administer to them whatever human helps that might be absolutely necessary...

『報徳記』の尊徳は、「災難轉轉」する「禍の根元」に、孫右衛門の「自然の道」に反した行為があるのではないかと見る。こゝでいわれている「自然の道」とは、「小を積みて大を致すは自然の道なり」(一五)と云われるといふの、万物を貫く〈因果の理〉に他ならぬ(「天地間万物一理」)。尊徳によれば、飢饉に際し米穀を高値で売るなど而を築いた孫右衛門の「ま方は」の「理」に反しており、「人の憂ある時に当り我独り利を貪る」その行為は「天の廢する所」であるから、今回の災禍は当然の結果と断ぜられる。しかし最終的には、尊徳は孫右衛門に家財を売り払い困窮者に施すところ、「至誠」の行為を勧め、「不正」なや蓄財によつて一から家産を再建させてやる。内村は、かよつた尊徳の行き方を次のように評する。

Thus he stood between Nature and Man, restoring to the former them who through their moral obliquity had foreited the right she so freely bestowed upon them. (⇒) 内村は、Nature と Man の間に立つて人を "Reason of Heaven and Earth" = 〈天地の理〉と「和解」やゝるの尊徳の方法だと言へ。この "Reason of Heaven and Earth" は、先の「天地間万物一理」の訳語とみられるが、先述したように『報徳記』における「一理」は万物を貫く〈因果の理〉であつて、この「理」にかなう「天」を感じしめる道(人道)として尊徳が孫右衛門に提示したのが先の償罪と勤労であった。この挿話の〈翻案〉において内村が「天地間万物一理」に対応させた "Reason of Heaven and Earth" は、Universe and its Laws (「宇宙とその法則」) とも訳されてゐる。内村における Laws ("宇宙の法則") は、「天道」

「人道」とを貫く根源的な道理に他ならない。孫右衛門の

impossible.” (IV)

償罪と勤労と云う「人道」は Laws (『宇宙の法則』) にかな
い、それ故に Nature (天道) とも和し得、社会関係も回復
される。かくして内村は、「天道」に則る大自然として理
解される「天地」に対しては Nature を対応させる一方、
根源的な〈天地の理〉 (Reason of Heaven and Earth) = 「宇宙
の法則」 (Laws) によつて貫かれた、「天道」の世界 (Na-
ture) と「人道」の世界 (Man) との総体として理解される
「天地」には Universe = 「宇宙」を対応させつつ、『報徳
記』を〈翻案〉してゐるとみる) ことがでやう。

3 「生長」する「宇宙」

内村の考へる「宇宙の法則」の特質は、次のような尊徳
の言葉の〈翻案〉にも表れてゐる。

「夫れ天地の運動頃刻の間断あるなし。是故に万物
生々息まず人之に法り間断なく勉励する天の運動の如
くならば、困窮を求むと雖も得べからず。」 (一一一)
| | | | |

→ “Universe moves on and on, and a stop then is not in
the growth of all thing around us. If but a man conform
himself to this law of everlasting growth, and with it
cease not to work. Poverty, though he seek it, is

万物の生育を促す「天道」の働きに他ならない。」の「運
動」に「法り」、絶えず「勉励する」ならば、人は豊かな
実りにあずかる、と『報徳記』の尊徳は云う。内村はこの
〈天地の運動に法る〉 ところを Universe の law of
everlasting growth (『宇宙の永遠の生長の法則』) に「自らを順
応せやべ」 (conform himself) しようと転釈する。「宇宙の法則」
に順応した人間は、自らも「宇宙」全体の growth に参与
し得る、というのである。もとより『報徳記』における
「天地」 = 大自然の「運動」は例えば四時の変遷の「いく
基本的には円環 / 反復運動であるのに対し、内村の
growth = 「生長」は持続的・直線的な進化発展 (Evolu-
tion) を意味する。ゆえにこのような growth 觀念の挿入は、
つとに進化論との折衝によつて形成しつつあった自らの
〈生長する「生体」としての「宇宙」像に基づく転釈とみ
ゆえ) がである。いずれにせよ、かような〈天地〉の運
動に参与する人間〉から〈宇宙〉の生長に参与する人間〉
へ、という読み替えにも、内村の「宇宙」の、『報徳記』
の「天地」との連続面が示唆されてゐるところである。

1 「宇宙」と「無教会」

1 「宇宙を繋ぐ正氣」としての神

本節では、*Japan and the Japanese* とほぼ同時期の著作において、内村の宇宙觀を、「報徳記」にみえる伝統思想、および「無教会」との関わりを視点に検討する。先述したとく内村は、「天地」固有の道である「天道」、

人間の作為工夫たる「人道」、それらを貫く根源的な「理」、人間の「至誠」に感じて動く「天地」、「天地」の運動に参与し得る人間等を、注目すべき伝統的世界像として「報徳記」から抽出した。とすれば、次のような内村の言明にも、それらの積極的な継承が伺えよう。

精神とは物の靈なり、即ち宇宙を繋ぐ正氣なり、即ち

物理 (Physical law) として物質界に現はれ、生 (Life) として動植物に働き、道として靈なる人を支配するものなり、……而して吾人の心志此宇宙の大氣に接して吾人の思惟は万物と和し、吾人の行為は自然に治ひ、乾坤我を扶けて我は天地と共に働くに至る、いわれて「宇宙を繋ぐ正氣」とは、創造主として「宇宙」に対し超越しつつ内在する「靈なる神」に他ならない。自然界においては自然法則 (物質界の物理・生物)

界の生理) として、人倫の世界においては「道」として、根源的な「宇宙を繋ぐ正氣」＝「靈なる神」が偏在し、「宇宙」の秩序を保持しているのである。「吾人の心志此宇宙の大氣に接して吾人の思惟は万物と和し、吾人の行為は自然に治ひ、乾坤我を扶けて我は天地と共に働くに至る」。かような「天地」と「和し」た境地に生きるために要件は何か。それは内村においても「誠実」という内面性であった。

神は宇宙の精神にして誠実なり (精神誠実共に「ペルソナ」の特性なる)ことを記憶せよ)、即ちカーライルの称する Eternal Verity (永遠の誠実)なり、默示録記者のアーメンたる者 (The Amen)なり、而して我の信ずる處によれば我の救はるゝは我が誠実を以て誠実の神を信ずるに依るなり。⁽¹⁾

内村にとり、「宇宙を繋ぐ正氣」としての神は「宇宙の精神にして誠実」なる神である。「正氣」なる神は、「道」としてのみならず人格的な「精神」として偏在する。万物の保持、それは「宇宙の精神」の「誠実」なることの証左に他ならない。そして内村によれば、「我の救はるゝは我が誠実を以て誠実の神を信ずるに依る」。すなわち「万物と和し」「天地と共に働く」と可能にする(魂の救い)は、この究極的秩序即ち「宇宙」を創造し保持する

「誠実の神」への「誠実を以て」する信仰¹¹・信頼によつてもたらされる。しかし「我が誠実を以て誠実の神を信ずることは、現実には決して容易なことではなかつた。

私の全性は此宇宙は偽物にあらずして真正物なるを知れば、我は人生の最終目的は正義と慈悲と仁愛なるを知れば、時には僕人權を擅にし、明徳輝を失ふに至ると雖、時には利欲は成功し無私は失敗すると雖、我は我的目的を变幻極なき世の盛衰に依て定めず、万古不易万世不動の法則の上に築かんと欲す、即ち我は「有て在る者」(I am that I am)アーメンたる者、忠信なる眞実の証者¹²(默示録三章十四節)、即ち宇宙の造主にして保維者なる靈なる神を信ぜんと欲す。

ここには、歴史的現実における〈惡の存在〉に直面して、なお「宇宙」の「万古不易万世不動の法則」「宇宙の造主にして保維者なる靈なる神」を「誠実を以て」信頼せんとする者の苦惱が〈告白〉されている。

2 「宇宙の法則」としての「報償の理」と「増大の理」
もとより『報徳記』の尊徳もしばしば打開困難な現実に直面している。ただ『報徳記』の尊徳がそれを自らの「至誠」の不足に帰したのに対し、内村はあくまでも神の支配する「宇宙」の秩序・法則に訴え、「現世の不調」の理由

を問う。「天道〔ここでは「宇宙」に同じ—引用者〕是なり、非なる能はず、然れども現世は非なり、吾人の懷疑は現世のはならざるが故にして天道の非なるに因らず、爰に於て未来感念の哲学的必要は起る也¹³」。かくして「未来感念」いわゆる「来世」が、内村の「宇宙」の視界に入つてくる。

此宇宙は神の造り給ひし宇宙であつて、完全なる宇宙である、……而して報償の理は宇宙の理であるが故に永生の希望が生じるのである、恰かも物理界に於て「力の不滅」の原則が行はる、が如く、心靈界に於て報償の理は宇宙永遠を通じて働くのである、誠実の正義と憐憫と慈悲とは若し狭き家族の中に於て報いられざれば広き社会に於て報いられ、若し一国に於て報いられざれば万国に於て報いられ、此地に於て報いられざれば宇宙に於て報いらる、而かも誠実は拒絶せらる、毎に其報償の区域を拡められ、強度を加へらる、のである、家に拒まれて國に納けられ、國に斥けられて世界に迎へられ、此世に棄てられて未來永劫全宇宙に拾上げらる、又今報いられずして後に増大して報いられ、今世に報いられずして來世に倍加して報いらる、是れ皆な増大の理に因て然るのである、一人の友を失うて他により良き友をあたへらるゝと同然、同じ法則は全宇宙を通じ、永遠に涉りて行はるゝのである。

「恰かも物理界に於て「力の不滅」の原則が行はるゝが如く、心靈界に於て報償の理は宇宙永遠を通じて働らく」。ここにおいて内村の「宇宙」は明らかに「心靈界」をも包摂している。「誠実の正義と憐憫と慈悲」とが「此地」において報いられれば、「來世」において報いられ、しかも「誠実は拒絕せらるゝ、毎に其報償の区域を拡められ、強度を加へらるゝ」と云ふ。ここにおいて、「至誠」による勤労はいつか必ず実を結ぶという「天地の理」への尊徳の信頼は、「來世」をも包摂する「宇宙の法則」＝「報償の理」「増大の理」への信頼にまで（高められてゐる）といつてよいだろう。そして内村においては「此地」における「教会」からの「拒絕」もまた大きな問題としてあつた。

③ 「神田」 & 「無教会」

神の教会は宇宙の広きが如く広く、善人の多きが如く多し、余は教会に捨てられたり、而して余は宇宙の教会に入会せり。……宇宙の神を以て余の父の父と尊み、彼自身よりの黙示を以て眞理の標準と信じ、己の一身を処するに於ても、余の國に尽さんとするに於ても、基督教会に対する余の位置に於ても、余は悉く此標準に依て行はん事を勧めたり。⁽¹⁵⁾

「教会に捨てられ」て「無教会」（所属するべき教会の無い

者）となつた自分は「宇宙の教会」に「入会」した、と内村はいう。既成教会の〈外〉にあっても人は「宇宙の神」から直接「默示」を受け、それのみを「眞理の標準」とし得る——)のような「宇宙の神」との直接的交渉の可能性とそれゆえの個我の独立性が、内村の無教会主義の基調としてある。翻つて注目すべきは、第一節冒頭で引用した『報徳記』の（翻案）の挿入部分において見出されるdirectly & independentである。すなわち内村は、実直な労働によつてNatureから「直接に」報償としての収穫を得た「眞の独立人」として尊徳を称え、PEASANT-SAINT（農聖）、すなわち「手に鋤を取りながら心に宇宙の大真理を貯ふる人」という副題を付したのだつた。内村の尊徳論には、次のよつた箇葉も見える。

In this God-given Universe, with kind Earth to serve him, and merciful Heaven to bless, a man with a "Hand-plough each" can start his life, and be happy and independent. (乙)

(乙)の天与の宇宙——仕うべき情け深い「地」と眷むべき慈悲深き「天」——においては、人はおのおの「一丁の鋤」をもつてその人生を始め、幸いとなり、独立人たる)とがである。かくして神の創造になる「宇宙」——「天」Heavenと「地」Earth——に信頼する個我を核とする「無教会」キ

リスト教は、「宇宙の教会」、すなわち「宇宙」の中に確かな位置を占める「日本国自生の基督教会」として、内村の視界に徐々にその輪郭を現すこととなつたのである。

おわりに

Japan and the Japanese の改版 *Representative Man of Japan* のドイツ語版後記¹⁸⁾において、内村は次のように述べている。本書は現在の私自身を述べたものではありません。キリスト者としての今の私が、接ぎ木させられた、元の台木を示すものであります。私は、自分がはだかの自然人として、この世に生を享けたものでないことを神に感謝します。……遺伝は自然の法則ですから神の法則です。そのため超自然的宗教（キリスト教）によつて、すべて廃棄されてよいものではありません。中国の宗教によれば、純粹な天が純潔な大地と結婚し、はじめて良き実を結ぶといいます。すなわち、天がいかに純粹であつても、天だけでは実を結べません。キリストの言葉でさえも、石地に落ちたならば、たちまち枯れてしまします。……神の恵みは、天からと同じく地からも来なければなりません。そもそもなければ良き実を結ぶことはできません。

Japan and the Japanese の各人物伝は、「歴史的な人物像の忠実な描写」というよりも、内村の理解したキリスト教的人物像が「投影されたもの」で、内村「独自の宗教的人間像」の「創出」という色彩が濃いとされる。¹⁹⁾ たしかにそれらはいずれも〈翻案〉としての独自の価値を有するであろう。だがそこには同時に、自らの宇宙観が現に「接木」されている「元の台木」として内村が見出した伝統思想＝世界像も示唆されている。内村は、その二宮尊徳論執筆にあたり『報徳記』を〈翻案〉する過程で、自らの形成しつつあった「宇宙」の観念の、伝統思想との断ち難い連続性を改めて自覚せしめられることになったのである。「天道」と「人道」とが一つの「道理」によって貫かれた『報徳記』の「天地」は、内村において、「宇宙を繋ぐ正氣」として偏在する「誠実の神」によつて絶えず保持され生長せしめられていく「宇宙」となつた。ここに、伝統思想から明治プロテスタンティズムへの思想史的移行の一形態が認められる。²⁰⁾ このことは、講演「後世への最大遺物」（一八九四年）の終結部近くにおける次のような言及にも端的に表れている。

この人の伝『報徳記』を読みましたときに私は非常に感覚をもらつた。それでドウも一宮金次郎先生には私は現に負うところが實に多い。この人の生涯を初め

から終りまで見ますと、「この宇宙」というものは實に神様……神様とはいませぬ……天の造つてくださつたもので、天といふものは實に恩恵の深いもので、人間を助けよう助けようとばかり思つてゐる。それだからもしわれわれがこの身を天と地とに委ねて天の法則

に従つていつたならば、われわれは欲せずといえども天がわれわれを助けてくれる」というこゝういう考え方であります。⁽²¹⁾

前半期の内村の実践は、これに続けて語られた、「人に頼らずともわれわれが神にたより」⁽²²⁾にたよつて宇宙の法則に従えば、この世界はわれわれの望むとおりになり、この世界にわが考えを行つことができるという感覺」をよりどころとするものであつた。この独立した「宇宙に結ぶ個人我」としての発言と行動が「無教会」キリスト教へと連結することは先述した通りである。やがて後半期、内村には「キリストの再臨」による歴史の審判をもつて「宇宙の完成」が実現するという終末思想が兆すこととなる。それは、「誠実の神」が支配し保持する「宇宙」における「惡の存在」⁽²³⁾、「現世の不調」という難問が、「來世」⁽²⁴⁾ = 心靈界における「報償」によつてではなく、あくまでも現実世界における「万物の復興」⁽²⁵⁾（=「宇宙の完成」）によつて、最終的な解決をみるとの「感覺」⁽²⁶⁾ = 確信であつた。その間に進行

した内村の宇宙觀の変容過程、とくにその終末思想と伝統思想の関連如何、また、同時代に現れた宇宙觀との比較等、残されている課題は多いといわなければならぬ。

注

(1) 大賀一郎に贈つた写真裏に記された言葉。大賀一郎「内村先生の思い出の数々」、鈴木俊郎編『追想集 内村鑑三先生』（淡路書房、一九四九年）一二五頁。「」は私訳、以下同じ。英語で「宇宙」を言い表す際、内村は普通 Universe を用いるが、Cosmos は特に整然たる物理法則の行き渡つた「宇宙」を言い表す際の用語で、「整体」とも訳される。

(2) 内村の思想における「宇宙」の重要性を最初に論じたのは、松沢弘陽「内村鑑三の歴史意識（一）」（『北大法学論集』第十七卷第四号、一九六七年二月）である。そこでは札幌時代に始まるキリスト教の創造主宰神信仰と進化論との調和探求の過程で、生物の種の変化における経験則としての進化(evolution)が、「生体」たる「宇宙」の生成発展の原理としての「進化」(Evolution)に高められてゆく過程が詳説されている。川喜田愛郎「内村鑑三の『天然』觀」（『内村鑑三研究』第二号、キリスト教図書出版社、一九七四年）は、内村の「有機体としての宇宙の説」に「ロマン派生物学」の影響を感受する。荒川紘『日本人の

宇宙観』第7章「明治の近代化と宇宙意識」第4節「内村鑑三とキリスト教の宇宙」（紀伊国屋書店、一〇〇一年）は、近代日本におけるスペンサーの宇宙論的哲学と社会有機体説の受容史における内村の宇宙觀の独自的位置を認めている。鵜沼裕子「内村鑑三－「天然」觀を中心に」（『近代日本のキリスト教思想家たち』日本基督教団出版局、一九八八年）は、『代表的日本人』等にみえる内村の「天然」の、「西歐的自然よりはむしろ東洋の伝統に由来する思想」との親近性を指摘し、陽明学の「万物一体の仁」との共鳴を聞き取っている（実際、内村は同時期に著した『地理学考』（一八九四年五月、警醒社）において『大学問』の「大人者以天地万物為一体者也 其視天下猶一家中國猶一人」を引用し、「我等は日本人たるのみならず亦世界人（Weltmann）たるべきなり、一手も之を眼前に置けば宇宙を掩ふに足る、視力を一小国に注射して世界の市民権を放棄するべからず」と述べている（『内村鑑三全集』第二卷三六三～三六五頁。以下、『全集』一一三六三～三六五と略記）。内村の宇宙觀と陽明学の関連については、今後の課題とした）。*Japan and the Japanese* の二宮尊徳論に内村の宇宙觀の伝統思想との関連が看取されることは前掲松沢論文も示唆しているが、尊徳論に見える宇宙觀の『報徳記』本文との照合・検討はこれまでのところなされていない。

(3) 本稿でいう〈翻案〉とは、翻訳における觀念の転写・敷衍・挿入等によって結果的に生ずる原著の改変の謂であつて、文学一般にいってはその原著の意図的な改変・創作のことではない。*Japan and the Japanese* の二宮尊徳論が専ら『報徳記』に拠つてゐることは、つとに鈴木俊郎「解説」（岩波文庫『代表的日本人』一九四一年）によつて指摘され、鈴木範久『『代表的日本人』を読む』（大明堂、一九八八年）の詳細な資料照合により明らかにされている。尚、本稿の『報徳記』テキストは、内村が読んだものと同じ大日本農会発行、農商務省蔵版（一八八五年初版、一冊本）の第二二版（明治四一年）に、*Japan and the Japanese* は『内村鑑三全集』第二卷（岩波書店、一九八一年）所収の初版によつた。

(4) 内村がこの尊徳論において多用する *Nature* の〈出典〉は、次の文章が引用しているワーズワース詩の一節に求めることができる。

科学は物質上に於ける原理と法則を研究するものにして之を学んで後始めて能く神の原理と法律を曉るを得るなり、中古時代の科学なしの哲学は基礎なき哲学として棄てられし如く科学なき神学は基礎の弱き神学と曰はざる可らず、詩人ラルゴラス歌で曰く

To the solid ground of Nature / Trusts the mind that
builds for aye!

永久ニ築カントスルノ人ハ／万有ノ堅固ナル土台ニ
頼ル

万有は神の衣裳にして我等の五官を通して靈なる神を
我等に伝ふるものなり、我等物に拋つて靈を見認め靈に
拋つて物を解するなり、昔時より今日に到るまで卓越な
宗教家は万有の子供なりき、……万有は偉大人物の手
に於て宇宙の原理を我等無智の人々に伝ふる時の善良なる
教授用見本となれり、（『理想的伝道師』、『基督教新聞』
第四五三号、一八九二年四月、『全集』一一六七八）

このワーズワースの詩句は、札幌農学校時代から内村が
読んでいた英國の科学雑誌 *NATURE* の表紙に掲げられて
いたものである。ワーズワースの原詩では *nature* である
が、表紙の引用においては *Nature* と表記されている（拙
稿「『我等は四人である』をめぐって—ワーズワース *WE
ARE SEVEN* の対比を中心にして」、「内村鑑三研究」第二
九号、一九〇〇六年八月）。こゝにおける *Nature* は内村に
とつて「物質上に於ける原理と法則を研究する」自然科学
の対象でありながら、同時に「靈なる神」を伝える「神の
衣裳」でもあった。周知のように、西欧思想史において
nature は一般に人間主体（「人為」「精神」「意識」等）と
nature を超えたもの（キリスト教の創造神等）との一方
向に對立者をもつ（柳父章『翻訳の思想—「自然」と *NA-
TURE*』平凡社、一九七七年）。なお、後年内村は *Na-*
ture に対応する日本語として「天然」を使うようになる
(赤木善光『漱石と鑑三』「自然」と「天然」—教文館、
一九九三年)。

(5) 新旧二つの岩波文庫版（一九四一年の鈴木俊郎訳・一
九九五年の鈴木範久訳）いずれにおいても「自然」と訳さ
れている。しかし『報徳記』に見える「自然」は「自然の
道」「自然の道理」「天命の自然」等、いずれも事物の本来
的な在りようを示す言葉であり、実体的な自然界 *nature*
を意味するものではない。

(6) 「天に従ふは自然たり、之を名づけて天道といふ、人
を以て作事と為す、之を名づけて人道といふ。人道は田畠
を開き、天道は田畠を廢す、人は五穀を植へ、天道は生育
を為す。天道は自然に為り、人道は作事に為り、天道は人
道と和し、百穀実法を結ぶ」（『万物發言集』、『二宮尊徳全
集』第一卷（二宮尊徳偉業宣揚会、一九三一年）、三九二
頁）。

(7) 『』は改版 *Representative Man of Japan*（警醒社、一九
〇八年）における挿入句であるが、以下『the』は省略す
る。)の Universe の冠詞 the の挿入は、一九〇八年の改
版執筆当時の内村において、實在としての「宇宙」がいつ
そう明確になつてゐたことを示すものだらう。なお、
Japan and the Japanese と *Representative Man of Japan* の異同
については、前掲鈴木範久『代表的日本人』を読む』卷

末の資料に詳しい。

(8) *Japan and the Japanese* の各章における Nature, Universe および Heaven の使用数は次のとくである。

Heaven	20	2	2	7	0
Universe	3	0	7	0	0
Nature	0	3	13	0	1
西郷隆盛	上杉鷹山	二宮尊徳	中江藤樹	日蓮	

超越者とかかわる Heaven (「天」) が陽明学に言及する西郷論・藤樹論において多用されているのに対し、〈究極的秩序〉の存在に関わる Nature や Universe が尊儒論で多用されている。

(9) 『精神的教育』を論ず、「国民之友」第一四五号、一八九五年一月、『全集』三一一六〇～一六一。「宇宙を繋ぐ正氣」が「天地正大の氣」(藤田東湖『正氣歌』)の読み替えであることはいうまでもない。内村の「正氣歌」受容とその意義については、拙稿「内村鑑三と水戸学の詩歌——『不敬事件』を中心にして」(『国際基督教大学学報IV—B 人文科学研究 キリスト教と文化』第三六号、一〇〇五年三月)を参照されたい。

(10) 『求安録』警醒社、一八九三年、『全集』二一一〇六。

(11) 同前、『全集』二一一〇五～一〇六。

- (12) 「永生の冀望」、『福音新報』第七二号、一八九六年十一月、『全集』二一一六七～二六三。
(13) 「報償の理」、『聖書之研究』第一一五号、一九〇九年十一月、『全集』十七一五一～五三」。

(14) 内村は「神と天使と人類とは靈界組織の機關」(Members of spiritual kingdom)に属すとして、「心靈界」を有機体としての「宇宙」の中に位置づけ、「樹木其一枝を失へば全木之が為めに苦し」むゞとく「絶対無限の靈なる神自ら人の為めに苦しまれるべからず」、ゆえにキリストの受肉と贖罪は必然であったとする(前掲『求安録』、『全集』二一一四〇～一四一)。「贖罪」の教理の宇宙論的説明といえよう。

(15) 『基督信徒の慰め』第四章「事業に失敗せし時」、警醒社、一八九三年二月、『全集』二一一三八。Peasant-saint (農聖) はカーライルの『衣裳哲學』(Sartor Resartus) 第二卷第四章にみえる。

(16) 前掲『基督信徒の慰め』第三章「基督教会に捨てられし時」、『全集』二一一三三～一五。

(17) 「我が信仰の表白」、『六合雑誌』一三一号、一八九一年十一月、『全集』二一一二一～二一八。傍点引用者。

(18) 執筆は一九〇七年五月。前掲岩波文庫版『代表的日本』人(一九九五年)収録の鈴木範久訳によった。

(19) 同前、解説(鈴木範久)。

(20) 「天道」と「人道」を区別する尊徳の「天地」はむしろ近代的世界像に近いものであって、道徳と自然とを連続的に捉える儒教一般の伝統的世界像とは異なるとし、これを「伝統思想」という枠組で捉えることの問題性を指摘する見方もあるが、〈交感〉する「天道」と「人道」、その根柢としての「天地間万物一理」を説く『報徳記』の世界像は、西欧の自然科学的世界像とはやはり異質であり、内村もそのような認識の下に「伝統思想」としての『報徳記』の世界像を積極的に継承しようとした、とみるのが本稿の立場である。

(21) 岩波文庫版『後世への最大遺物』(一九七六年)六二一頁。傍点引用者。

(22) 内村が『報徳記』から受けたというこの「感覺」については、鈴木範久『我々は後世に何を遺してゆけるのか——内村鑑三「後世への最大遺物」の話——』(日本図書センター、一〇〇五年)も注目し、それを「理性とか言葉ではなく『感覺』としか表現できない」「インスピレーション」「靈感」と捉えている。

(23) 例えは「渾一觀」を理想の境地とする三宅雪嶺の有機体的宇宙觀は、その著『宇宙』(一九〇九年、政教社)。『日本人』における連載(原題「原生界と副生界」)は一九〇二年二月～一九〇八年十月)において、ヘーゲル、スペンサーから学んだ科学的・哲學的知識に基づいて論述され

てゐるが、陽明学をはじめとする伝統思想との連関も看過できない。また、同時代のキリスト教思想としては、同じく儒教的伝統思想の濃厚な継受が指摘されている海老名彈正との対比が重要な課題になるが、海老名の場合、「神性」の内在を認める人間主体(人間觀)が主たる問題となつてゐるのに対し、内村においては、人間主体を含む世界像の全體が問題とされているところに大きな特徴が認められる。

(高城学院中学校高等学校教員)